

同 志 社 大 学

2009 年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2010年 3月 8日提出

所 属	職 名	氏 名
文 学 部	教 授	龍 城 正 明
研 究 題 目	選択体系機能言語学的アプローチによる日英語対照研究	
研 究 成 果 の 概 要	<p>本年度は昨年度に引き続き、選択体系言語学理論の日本語分析理論である the Kyoto Grammar の枠組みにより、日本語の形容詞の本質について重点的に考察し、英語を中心とする西洋語の形容詞とはその性質が異なることの分析をさらに進めた。</p> <p>選択体系言語理論における英語の形容詞は、修飾語としての機能のみを分析しているが、日本語の形容詞は修飾語としての機能に加え、それ自身が述語となる機能を有している。その為日本語の形容詞には時制が生じる。これは伝統的に形容詞が屈折変化をする動詞と同様に「用言」として分析されてきたことにも適っている。したがって、the Kyoto Grammar の枠組みでは日本語の形容詞を意味化(semanticization)して捉え、動詞と同様に、過程構成(transitivity)の中で捉えることとした。その際動詞とは異なる静的過程(static process)という新しい過程分類を設け、形容詞の述語機能を分析した。その結果、日本語の形容詞は修飾機能としての attributive function と述語機能としての predicative function の2つを明確に区別して分析することが可能となった。</p> <p>特に、本年度は predicative function の主要部分を占める、英語の be 動詞が日本語ではどのように具現されるか各種言語データを収集し分析している。通常使用される現代日本語の「です」は丁寧語としての助動詞であり、本来は「である」が断定の助動詞+動詞として、be に対応する適切な語であることを主張し、これを基に日本語過程構成における存在過程としての分析を進めている。</p> <p>本分析の結果は、適切な時期にまとめて、論文として発表の予定である。</p>	